

ダニエル書 - 第八十四番

ラオデキヤ的アドベンティズムの四世代の解明：聖書的平行法と預言の検証をたどる旅

Jeff Pippenger

2024-02-17

真理は二人または三人の証言によって確立される。そして、エゼキエル書8章の四つの忌むべきことをラオデキヤ的なアドベンチズムの四世代として適用することには、それを裏づける証言が複数ある。以前の記事では、黙示録2章と3章の七つの教会が、使徒の時代から世の終わりに至る現代イスラエルの歴史を表すだけでなく、モーセの時代からキリストの時代に至る古代イスラエルの歴史をも表していることが示された。

エペソの教会は、初代教会を表すと同時に、モーセの時代から士師の時代までの古代イスラエルも表している。スミルナの教会は、弟子たちの時代からローマ皇帝コンスタンティヌスの時代までの迫害の時期を表し、また、それぞれが自分の目に正しいと見えることを行った士師の時代も表している。ペルガモの教会は、コンスタンティヌスの時代から538年の教皇制に至るまでの妥協の時代を表すとともに、古代イスラエルが神を退けて王を選び、周囲の異教の諸王国とたびたび妥協した時期も表している。イゼベルに象徴される第四のテアテラの教会は、538年から1798年までの教皇支配の時代を表し、また、古代イスラエルのバビロンにおける七十年の捕囚も表している。

それら四つの教会は、アドベンチスト運動の四世代をも表しており、エゼキエル書の四つの忌むべき行いを四世代に適用することの証しを与えている。1863年の反逆は、アロンが金の子牛を作ったときの反逆に見られるように、古代イスラエルの第一世代になぞらえて表されている。第一世代にはエペソの教会に与えられた勧告が含まれており、そこでは神の民が初めの愛から離れてしまったことが示され、悔い改めて初めの愛に立ち返る必要があるとされている。1863年には、ウィリアム・ミラーの宝石（基礎的な諸真理、特に「七つの時」）によって表される初めの愛が退けられ、神の民は立ち返るよう勧められた。

しかし、あなたに対して責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまったのだ。だから、あなたがどこから落ちたのかを思い起こし、悔い改め、初めの行いをしなさい。さもないと、私はすぐにあなたのところに行って、あなたが悔い改めないなら、あなたの燭台をその置かれているところから取り除く。黙示録 2:4, 5

ミラー派は、エレミヤが「あざける者の会衆」と呼んだ背教的なプロテスタント主義と闘い、幻が到来するのを忍耐強く待った。それが到来すれば偽ることはないからである。「あざける者の会衆」は、ヤロブアムの偽りの礼拝に叱責を下したユダの預言者に嘘をついた老預言者によって象徴されていた。

わたしはあなたの行いと、あなたの労苦と、あなたの忍耐を知っている。また、あなたが悪を行う者たちを耐え忍べないことも知っている。自分を使徒だと言いながらそうでない者たちを試し、彼らが偽り者であることを見抜いた。あなたはよく耐え、忍

耐し、わたしの名のために労し、くじけなかった。ヨハネの黙示録 2:2、3。

第二の教会スミルナは、初期キリスト教会における迫害の時代を表していたが、その時代は真の殉教者たちと、聖なる動機とは言い難い理由で自ら迫害を招いた者たちから成っていた。またそれは、古代イスラエルで各人が自分の目に正しいと見えることを行っていた士師の時代も表していた。1888年に始まった反逆の世代は、預言の霊と、その時代のために選ばれた使者たち、そして聖霊に対する迫害の時期を画した。それはまた、ケロッグ、プレスコット、ダニエルズらに見られるように、ラオデキア的アドベンティズムの古参の人々が各々自分の目に正しいと見えることを行う時代を招き入れた。

その時代のごく少数の忠実な者たちは、ユダヤ人であると称しながら実はそうではない一派と、命がけの霊的な戦いに臨むことになった。彼らは指導的地位にあったにもかかわらず、サタンの会堂に属していた。ホワイト姉妹が、ある者たちは「天から追放された天使たちに導かれている」と証言しているとおりである。彼らは自ら賢いと称したが、愚かであった。その時期、賢い者たちには非難は向けられず、むしろ死に至るまで忠実であるよう励ましが与えられた。1915年、ホワイト姉妹が生涯で最後に語った言葉は「私は、自分が信じてきた方を知っている」であった。彼女は死に至るまで忠実であったからである。

あなたの行いと苦難と貧しさをわたしは知っている。(しかし、あなたは富んでいる。) また、自分はユダヤ人だと言いながらそうでない者たちの冒瀆もわたしは知っている。彼らはサタンの会堂である。あなたが受けようとしているこれらのことを恐れてはならない。見よ、悪魔はあなたがたのうちの幾人かを牢に投げ込み、あなたがたを試すであろう。あなたがたは十日の間、苦難に遭うであろう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはいのちの冠をあなたに与えよう。黙示録 2:9、10。

ペルガモの教会は、コンスタンティヌス帝の時代における真理と誤り、異教とキリスト教との妥協、そしてまた王たちの歴史の中で起こった古代イスラエルの妥協を象徴していた。それは真理と誤りの混合を表しており、そのようなものは誤りしか生み出し得ない。その表れの一つが1919年の聖書会議であり、そこでは背教的プロテスタント主義の偽りの福音により近いアドベンチストのメッセージを作り出すために、『キリストの教理』という書の出版が推し進められた。真理に対する大いなる妥協が起こったのは、アドベンチズムの第三世代においてであった。

教会が教会マニュアルを生み出すことになった妥協を始めたのは、1919年に始まるその世代であった。教会が医療関係の学校と宗教学校の双方に認定取得を求める妥協を始めたのも、1919年に始まるその世代であった。現代のカトリック系聖書への移行の動きが始まったのも、その世代であった。その歴史の中で、公然と反キリスト教的な政権と関係を結ぶことをいとわない指導部の姿勢が見られた。

南北戦争期、アメリカ史上最も致命的な戦争に徴兵されることになっていた教会の若い男性たちにとってより良い結果を得るため、ラオデキア派の指導部が米国政府と法的関係を結んだときに芽生えたその慣行は、第一次世界大戦の開戦時にも繰り返された。総会会長A・G・ダニエルズがドイツ政府と交渉し、ドイツが若者を徴兵して軍務に就かせ、武器を取らせ、安息日を顧みないことを承認したのである。ダニエルズのその行動は分裂

を招き、今日に至るまで存続するセブンスデー・アドベンチスト改革運動のさまざまな分派を生み出した。

その妥協はヒトラーのナチス・ドイツにおいても続き、その後はソビエト連邦を構成した諸国においても見られ、今日でも中国のような体制でなお堅持されている。国家統治との関係における第三世代の妥協は、ペルガモスの教会に象徴される、イスラエルの古代の王たちとコンスタンティヌスの妥協によって典型づけられていた。その時期はまた、プレスコットの『キリストの教義』に代表される「平和と安全」という偽りの福音に対し、教会運営が妥協していたことも示していた。

わたしはあなたの行いと、あなたが住んでいる所、すなわちサタンの座がある所を知っている。あなたは、サタンの住むあなたがたの中でわたしの忠実な殉教者アンティパスが殺されたあの日にも、わたしの名を堅く保ち、わたしに対する信仰を否まなかった。しかし、あなたに対していくつか責むべきことがある。というのは、あなたのところには、パラムの教えを堅持している者たちがいるからである。彼は、イスラエルの子らの前につまずきを置くようにバラクに教え、偶像にささげた物を食べ、また淫行を行うようにさせた。黙示録 2:13、14。

この姦淫とは、総会が、腐敗した政府との必要な協力関係を維持するという名目で、ナチス・ドイツやソビエト連邦のような諸国と歩調を合わせ、彼らが提携した諸政権による迫害に苦しんだその国々の忠実な信徒たちを顧みなかったことを指している。偶像に供えられた食物は、背教的なプロテスタント主義とカトリックの誤った方法論を表しており、それは当時、ラオデキヤ的アドベンチズムの大学に確固として確立されていた。これらの大学は、宗教と健康の双方において背教的な方法論の指針に従って運営されることに同意していた。

イエスは、始まりのときと同じように第三世代の終わりをも示された。というのも、1957年に刊行された『Questions on Doctrine』という書物の出版によって、第四世代の到来が印づけられたからである。この書は、真理と、背教的プロテスタントイズムおよびカトリックの誤った思想とのあいだに存在する救いに関する根本的な区別を完全に否定した。もちろんその書にはいくつもの誤った教えがあるが、要するに、人は再臨のときに奇跡的に変えられるまでは、キリストにあって勝利の生活を送ることは不可能だと教えている。その書は、二十五人の古老たちが太陽にひれ伏すことになる世代の始まりを画した。間もなく到来する日曜法の際にラオデキヤのアドベンチスト教会が日曜礼拝を受け入れることを可能にするために必要な政治的・宗教的要素が、すでに出そろっていた。

エゼキエル書における第四の忌むべきことは、第九章でごく少数の忠実な者たちが額に印を受けているとき、まさに滅ぼす天使たちがその働きを始める直前に起こる。この幻は、第八章一節、すなわち第六年の第六の月の五日に始まる。この幻は、太陽にひれ伏す者たちに対する裁きの執行の前日に始まり、太陽にひれ伏すことは教皇権のしるしであり、その名の数は「666」である。

イスラムの第三のわざわいが行った地の獣への攻撃をもって、2001年9月11日に、十四万四千人の封印の働きが始まった。その攻撃は諸国民を怒らせ、後の雨の到来を告げた。しかし、後の雨を認識するのは、イスラムの三つのわざわいが根本的な真理であることを

理解するためにアドベンチズムの基礎に立ち返るよう導かれた者たちだけであった。その時点で、エレミヤが「安息」（すなわち後の雨）と呼ぶ古い道へと導き戻された者たちは、第三のわざわいのラッパを吹き鳴らす見張り人となるか、あるいはラッパの響きに耳を貸すことを拒み、ひいては古い道を歩むことを拒む者となるかのいずれかであった。

彼らはその後、1863年に彼らの父祖が犯した反逆の罪によって試みられた。まさに同じ時に、キリストの義、すなわち「真理における信仰による義認」のメッセージが到来した。それはジョーンズとワグナーのラオデキアのメッセージであり、また、「四方の風」から来た死に絶えた干からびた骨に向けられたエゼキエルのメッセージでもあった。そしてその「四方の風」は、第三の災いのイスラム（解き放たれようとする「怒れる馬」）の象徴である。その忠実な少数の者たちは次に、1888年に彼らの父祖が犯した反逆の罪によって試みられた。それは、ニューヨーク市の巨大な建物が打ち倒され、黙示録18章の力ある天使が降り、黙示録18章1～3節が成就したときのことであった。

そして彼らは、後の雨のメッセージを識別できるかどうかで試された。後の雨は、過去の時代と同様に神の力の顕現であったのか、それとも神の力の顕現は過去にしかなかったのか。続いて、忠実な少数者は、1919年に父祖たちが起こした反逆によって試された。忠実な少数者がこれら三つの試練をどのように乗り越えるかが、彼らが額に神の印を受けるのか、それともラオデキヤ的アドベンチズムの二十五人の長老たちとともに太陽にひれ伏すことになるのかを決定する。

ラオデキヤ的アドベンチズムの四世代にわたるすべての反逆は、2001年9月11日に相応する出来事を見出す。イザヤが「東風の日」と呼んだその日は、十四万四千人の封印の時の始まりを画しており、しかも封印の時は一つの期間である。この期間の終わりは、その始まりによって示されている。というのも、イエスは常に物事の終わりをその始まりで例証されるからである。封印の過程の最終局面では、この期間の初めに示されていた試練が、再び繰り返される。

2001年9月11日、エゼキエル書の四つの忌むべき事柄によって表されるラオデキヤ的なアドベンチズムの反逆者たちと、黙示録2章と3章の最初の四つの教会が耐えられなかったその試練が到来し、セブンスデー・アドベンチストであると公言する者たちにとって、獣の刻印か神の印かのいずれかに至る試練の過程の始まりを告げた。

ラオデキヤ的なアドベンチズムの指導部は自らの欺瞞の縄に絡め取られており、アドベンチズムを誕生させた改革運動を含む過去の改革運動によって示された神の力の顕現の再現を「認める」ことは、彼らには事実上不可能である。古参の者たちは、ミラーの宝石で表される教理を散らし、偽造の硬貨や宝石で覆い隠した。キング・ジェームズ版聖書という宝石箱は古語の時代のものとして追いやられ、罪の人の用語で表現された現代語訳の聖書に取って代わられた。

もし古代の人々のうちの誰かが、後の雨のメッセージが平和と安全のメッセージではない可能性を考慮する用意があったとしても、過去の聖なる歴史における神の力の顕現こそが、十四万四千人の封印を具体的に識別するものであることを認識するのは、事実上不可能だっただろう。さらに彼らにとっていっそう認識しがたいのは、十四万四千人の封印を最も直接的に示す聖なる歴史が、マラキ書三章を成就する聖なる歴史であるという

点である。というのも、マラキ書三章は、契約の使者が突然到来するに先立って、その道を備える使者が常にいることを定めているからである。その使者は預言者エリヤによって表されており、彼は、自らの務めによるのでない限り、自分の時代には雨は降らないと大胆に宣言した。

エゼキエルの七十人の長老たちは、自分たちこそ主の宮だという自らの主張が根拠のないものであり、実のところ、それは、ちょうどぶどう園がそのぶどう園にふさわしい実を結ぶ者たちに与えられたように、退けられつつある民の主張を表しているのだと認めることなど、ばかげていると感じるだろう。第三のわざわいのメッセージも、道を備える使者も、ぶどう畑の歌も、彼らが信頼を置いてきた伝統や慣習に逆らって証言しており、後の雨を見分けることへのほとんど乗り越えがたい障害となっている。

14万4千人の封印の完結は、第三の災いにおけるイスラムの役割を「認識している」と主張してきた者たちに、同様の試練が課されることを明らかにしている。ミラライト運動を立ち上げた「知識の増加」は、1798年、「七つの時」の終わりに始まった。14万4千人の運動を立ち上げた「知識の増加」は、1989年、象徴的な「七つの時」（126年）の終わりに始まった。その126年にわたる背教の激化の間に、ラオデキア的アドベンチズムは第四にして最後の世代に到達した。

国や民が猶予の時の杯を満たすのは第三代と第四代であり、その時が今や到来した。ヒデケル川によって象徴されているダニエル書の「知識が増す」ことは、恩恵期間が閉ざされる直前にイエス・キリストの黙示の封印が解かれるときに増し加えられる知識でもある。

次の記事では、ダニエル書の最後の三章を取り上げます。

大いなる当惑と混乱が起こる日々は、急速に近づいている。サタンは天使の衣をまとい、できることなら、選ばれた者たちさえも惑わすだろう。多くの神々、多くの主が現れるだろう。あらゆる教理の風が吹き荒れるだろう。「偽りと呼ばれる科学」に至上の崇敬をささげてきた者たちは、そのとき指導者とはならない。知性や天賦の才、才能により頼んできた者たちも、そのとき隊伍の先頭には立たない。彼らは光に歩調を合わせてこなかった。不忠実であることを証明した者たちは、そのとき群れを託されることはない。最後の厳粛な働きに携わる偉大な人物はわずかである。彼らは自足し、神に依り頼まず、神は彼らを用いることができない。主には忠実なしもべがいる。揺さぶりと試練の時に、彼らは現れてくるだろう。今は隠されているが、バアルに膝をかかめなかった尊い者たちがいる。彼らは、あなたがたに集中的に強く輝いてきたその光を受けてこなかった。しかし、粗削りで魅力のない外見の下に、真実なキリスト者の品性の純粋な輝きが現れることがある。昼間、私たちは天を仰いでも、星は見えない。星は確かにそこにあり、大空に定められているが、目はそれを見分けることができない。夜になれば、私たちはその真の輝きを仰ぎ見る。『証言』第5巻、80、81頁。